

ら、江戸時代をかえりみ、和裁教授の方法及び、これが一般服装との関連について疑問を持ち、当時の文献からこれを究明したいと考え、本研究を企てた。その内本報は、前報の長着に引き続き、大裁羽織について考究する。

2. 江戸時代に発刊された裁縫書の内8種、即ち、指布裁様、万金産業袋、絹布裁要、裁縫早手引、裁縫独稽古、立物帳、裁物早学問、裁物早指南に示されている、大裁羽織の裁ち方について検討した。

3. ① 各裁縫書の特徴、並びに現代への方向づけ等については、長着の場合と同様である。

② 当時の羽織は現代と比較して、特に袷羽織において、仕立方に相違があるために、裁ち方についても相違点がみられる。

③ 時代によって、羽織丈に長短がみられるが、それに対しては、殆んど無関心である。

④ 絹布裁要の尺積り法は、長着の場合以上に難解である。これらの裁縫書刊行の目的の一つは、場所や時代によって異なる裁縫技術を、統一するため、一般女性への普及が期待されたが、それは成らず、お針師匠の参考書に終わったことも当然と考えられる。